

令和元年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」

(知事賞) 最優秀賞

(中央審査) 入選

水は限りある資源

今治市立大西中学校 二年 阿部 裕介

「味が、違う。」

姉が、顔を曇らせてつぶやいた。受験に合格し、県外の大学へ進学を決めた姉は、一人暮らしを始めるために引っ越しをした。家族総出で荷物を新居へ搬入し、少し休憩しようと、母がお茶を用意し始めた時のことだ。洗面所で手を洗い、口をゆすいでいた姉の一言。水道の味が、家の味と違う。旅行先でも、よく経験することだ。慣れない味に違和感を覚えるが、数日くらいは我慢できる。しかし、姉は今日から、この水で生活する。異郷の地の水を口に含んで、環境が変わることを、姉は改めて痛感した。姉の門出の日のこの一言は、家族を少し寂しい気持ちにさせた。

水は、人の心や体に、大きな影響を与える。「水が合わない」、「水に慣れる」、「水に流す」など、「水」が使われた慣用句が多いことから、人と水との深い関係が読み取れる。水は、私達が生きていく上で、欠かすことができない大切な資源だ。水の安定した供給が滞れば、人命に直結する深刻な問題となる。日本は世界の中でも降水量が多く、きれいな水源に恵まれ、その上、飲み水に対して厳しい基準を定めているため、蛇口をひねれば、いつでも安心安全な水を飲める環境にある。それ故、水に対する危機感が薄い。しかし、近年、度重なる自然災害を経験したり、水道の民営化法案が可決されたり、世界の水事情を報道で知ったり、水に関する問題に直面する機会が増えてきた。水への関心が高まっている今こそ、真剣に考え、動くべき時だ。水を守るために、私達一人一人ができることは何か。

「水は、限りある資源」

この言葉の意味を、改めて考えてみよう。私達は水を、どのような手段で手に入れていているだろう。主に、水道や井戸、ペットボトルであり、それぞれダム、地下水、湧き水から得ている。それらの水は全て、雨が溜まったものであり、雨は、海や川の水が蒸発し、上空で冷やされて降ってきたものだ。つまり、私達が飲む水は、常に新しいものが湧き出てきているわけではない。地球にある水の量は一定で、水は形を変えながら、地球の中を循環しているだけなのだ。私達はその循環の中から水を得て、循環の中に水を戻している。だから、「水は限りある資源」なのだ。

自然の循環サイクルが追いつかなくなると、汚染が蓄積される。自然による水の浄化機能を妨げているものは、人による過剰な汚染である。汚れた水の排水や、海をさまよう大量のプラスチックごみが、海や川の汚染を広げていることは、世界的ニュースになっている。水を守るため、つまりは、人命を守るためには、これ以上の汚染を止めなければならぬ。それには、一人一人が、「汚さない」という意識を高めなければならぬ。私達が水を汚せば汚すほど、もとに戻すのに時間がかかり、需要と供給のバランスが保てなくなる。食べ残しや飲み残しをやめる。洗剤は適切な量を使う。川や海へ流されないよう、暮らしぶりを見つめ直さなければならぬ。さらに、「節水」が重要だ。こまめに蛇口を止めるだけでも、回数が増えれば、取り組む人が増えれば、膨大な量を節約できる。使う水の量を減らせば、水をきれいに戻す労力も減る。以上の点は、以前から言われ続けているが、誰かの「ちよつとくらい」の行動の積み重ねで、とてつもない汚染へとつながっているのだ。

姉が、帰省した。変わらない、慣れ親しんだ水は、故郷への愛着を深める。いつも同じ状態で出てくれる水。それに甘んじることなく、私達一人一人がすべき事をやらなければいつまでも同じ条件で水を得ることは難しくなっていくだろう。一刻も早く、動かなければ。